

# 神さまからさしむけられるお金

新たな教祖直筆資料から

大林浩治

## | お金のことが気になりだして…

### 最近の出来事から

わたしは、ここ近年、お金のこと、お金の世の中のことが問題になってきました。でもお金とか、その仕組みのことは、ちんぷんかんぷんです。よく考えずに生きてきました。そんなわたしですが、社会保障基盤が衰退しているとか、また環境破壊が深刻だといった声を聞くと、「そうだ問題だ!」とか、「大丈夫なのか?」と思ったりします。世の中は、経済の成長が必要だとしていますが、それでいいのかなあ、と(たとえば、景気が良いという実感は、どうい根拠で言っていて、現在、株価が上がっているから景気が良いというのは、どうい理屈なの?とか、みんなの年金をいま株で運用しているけど大丈夫なの?相場が下がれば、その分の補填は税金でするの?でもそのとき誰が責任とるの?などなど)。そしてお金が絡んださまざまな事件や出来事を目にして、あれこれ考えるようになってきました。

昨年のごとで言うと、たとえば原発に関わってのお金の登場のしかたが心に引っかかりました。昨年十一月十一日、日本政府はトルコに続きインドにも原発を輸出することを発表しました。それから四日後の十五日です。当時小学生だった児童へのいじめがあったと報じられました。原発事故によって福島から横浜に避難してきた児童へのいじめです。「賠償金あるだろ?」と脅しが繰り返されていたというのです。お金もうけて原発が見られ、お金はその原発が起こした事故の被害者にも要求されていたのです。

これも昨年の七月二十六日です。相模原での障害者殺傷事件の犯人が「障害者は不要だ」と叫びました。かつて働いていた職場での犯行です。私には、この排除の論理は、犯人だけのものじゃないように思えたのです。世の中にはこんな思いが蔓延しているのではないかと。「俺たちは働く機会を奪われた。けれども障害者は、障害があるという理由でお金をもらっているじゃないか。俺たちには何もないのに」と。働いてお金を得る機会を奪われたとき、自分よりも劣位にある人間の方を攻撃する世の中になっている。そう思ったのは私だけでしょうか。詳細はわかりません。

つい最近も、新聞で「時間かせぎの資本主義は限界だ」とか、「経済成長と幸福の実感は、まったく別物だ」といった記事が載っています(「波聞風問」『経済気象台』いづれも朝日新聞、平成29年11月21日)。お金が物言う世の中は、いろんな意味で根本的な見直しに迫られているようです。

「世の中、お金がすべてではないよね!!」てことを、ほんとうは誰もが言いたいし、そう思いたいに違いありません。でも、お金がなくてもいいなんて言えない生活現実があるのも事実です。

いったいこんなお金に対して、いや、こんな風にお金が問題になる世の中に対し、信心はどうい道付けを与えるのでしょうか?

### このお道では…

お道では、お金にかかわる問題をどのように見ているのでしょうか。こういうものがあります。「金光教を信ずれば金が儲かるといいますが、あれは本当ですか」と問われ、「さあ、金がそれほど儲かるかどうか存じませんが、あまり金に不自由はしないようになりますね。現に私がそうです

から」と答えた人がいます。その私とは？そう、高橋正雄です（高橋正雄「金」昭和9年7月31日\*大阪の新聞掲載記事、新聞名は不明）。

高橋は、道のことかわかればわかるほど、お金というものが「なければならぬというものではない」ことがわかると言っています。なくても困らない人になると、金の尊さ、ありがたさがわかり、よい持ち方、使い方ができるって。

そうしてこう言われます。「金は人間の生命が形を変えているものと見てもよい」が、「生命そのものをもっているわれわれ人間が、その変形したものであるところの金がなければ困るというのも、本末転倒した話ではあるまいか。金のことを考えて見るにつけても、大切なことは生命そのものの生き道、生き筋を迷わず失わず、進めて行くことであろう」。

### とはいえ、考えなくちゃいけない問題もあるようで

まったくもってそうだとと言えるのですが、でもそれが言えることって難しいですよね。その難しさへの目配せはどうなっているかを見てみると、ただこう言われているだけなのです。「道が分かればそれでいい」。なんだか頭ごなしの言い方に見えてきます。世の中のことなんかはそっちのけの単なる信心至上主義になってしまっているじゃないか。そんな気がします。

高橋正雄自身がくぐり抜けたきつい経験は、いかなる時にもそう言わせるのでしょうか、そうなること皆が皆、その経験を味わうことが前提となります。それでいいのかどうか、わたしは、それとは少し違うことを見ていきたいと思ったのでした。それとは別な角度で、高橋正雄が言っていた大事なことを考える必要があると思ったのです。

つまり、問題となるその現場がどうなっているのかを見ることです。「お金というものがなければならぬというものではない」。このことが「道のことかわかれば」という要件、信心の筋合いで言われています。けれど大事なのは、それがどこで言われているのか、でしょう。

その場所こそ、「お金がなければならぬことになっている社会」なのではないでしょうか。それこそが信心の現場でしょう。そこに目を向けることをおろそかにしては、ほんとうに道がわかったことにならないのではないのでしょうか。

高橋正雄に文句を言うつもりはありません。大事なことが言われていると思います。それだけに世の中に信心を生かしていくことが大事になるのじゃないか。道を求める余り、世の中のことに風馬牛であっては、人が生きていく上で教祖さまが道を立てられた、その道の真価は発揮できないのではないのでしょうか。

### そんなこんなで

ようやく、今日のお話の入り口までやってきたように思います。

世の中の問題として、お金を見ることも必要だ、そう思ったわたしは、じゃあ教祖さまのところまでどうだったのかなあってことを考えるようになったのです。

そうしたところ、教祖さまに直接関わる資料が出てきたのです。「なんちゅうタイミングや!!」と、びっくりしました。その資料が今述べた問題関心とまともにかみ合うものだったのです。出てきたのは、ほぼ全体といってよいほど金銭勘定の内容なのです。

### 新しい資料について

実は、先の論文（『「神の頼みはじめ」における貨幣—貨幣経済に向かう神と人との関わり—』『金光教学』第55号、20

15)でもお金のことを取り上げました。安政四年の十月十三日の神の頼みの出来事を探っていたのです。屋敷建築のためのお金を神が頼んでいます。「そこでのお金は何?」「どういう登場の仕方なの?」と考えたのでした。

普通、こんな疑り深い問いをなげかけることはないでしょう。でも、「屋敷を建ててくれ」ではなく「屋敷を建てるにもお金がないので頼むよ」という神さまの頼みって、気になりませんか?手取り早く、「屋敷を建ててくれよ」って言えばいいじゃないですか。なのに、その手立てであるお金のことで頼んでいるのです。そこからは、世の中は何をするにもお金が必要になっていて、そんな世の中を逆に問題にするような頼みになっているのではないかと見えたのです。

「そんな取りあげ方ってまっとうなの? 無理矢理な見方じゃないの?」っていう声も正直ありました。そう言われて「そうかもしれないね。でも、そう見えちゃったんだ」って答えていたのです。ところがです。今回出てきた資料によって、教祖さまのところでは、お金のあり方がずいぶん問題になっていたとわかったのです。かえって慌てました。自分自身の問い方も、あれでほんとうに良かったのかと見直す要に迫られました。それでなんとか今回発表した論文になったのです。

資料は、安政四年を起点にし、そこからお金の意味を辿り返すような格好をとっています。金銭勘定をしながら、無心のことや、浅吉さんのこと、棟梁のことが取りあげられています。そしてその取りあげは、無心や浅吉や棟梁といった問題の方を見るのではなく、それが問題になるようなお金であり、「お金の世」を見返すようなことになっているのです。その際、見返す起点となっていたのが安政四年の神の頼みだったのです。

## II 論文で見つけたこと

### 弟への援助

資料には弟さんへの援助内容が書かれており、「金神様おかげのはじめ」と意味づけられています。そこには、「今日まで自分自身を動かしてきたのは何か」といった問いかけがあるようです。

興味深いのは、安政六年の立教以降も、弟さんへの援助が続いていたことです。それと関係もするでしょう。神勤に専念したことで支払われるお金が安政四年を起点に計算されていたのです。

### 広前で支払われた諸費用

そのことは、慶応四年五月になされた記事でわかりました。それまで支払われた広前での「諸入用」の金額の検算がなされていたのです。いつから見直されているのかと見てみると、安政六年の神前恪勤の時点からではありません。それより前の弟さんへの支出から見直されていたのでした。

ちなみに、その見直しをしている慶応四年のその頃は、浅吉さんの借財の返済が一段落ついたものの、棟梁解雇に至るお金の問題が新たに起きていました。いろいろ大変な中での見直しです。

「諸入用」の費用とは、広前で必要になった諸経費です。そこで支払われたお金は、神さまからの「さしむけ」とされています。「さしむけ」として、各方面からの無心や、吉田家との交渉、尊瀧院からの免許取得にかかった経費、またその尊瀧院山伏が免許状を奪った件の経費が計算されています。そしてそれに、安政四年の弟さんへの出費も組み入れておられたのです。

当初から広前ではいろんな差し障りが生じています。そのなかで神勤に専念するようになったきっかけ、神さまとの関わりの絶大な意味を今一度確かめなくてははいけません。安政四年の神さまからの頼みは、その確かめの起点となっていたのです。

## 広前の奉献金

神さまからさしおけられたお金には、奉献金があてられました。この奉献金は、どういった意味を帯びているのでしょうか。そこには信用の問題が考えられます。つまりこういうことです。

教祖さまの神勤は社会的行為です。参拝者がいる事実は、その神勤に社会的信用が生まれていたことを示します。参拝者の奉献金は、その社会的信用がお金というかたちになったものと言えるでしょう。そしてその奉献金には、お金というかたちを取った信心の価値があらわれていると言えるのです。とはいえ、信心の価値といっても、それはお金をやりとりする形式(金銭遣い)を通じて現れた「価値」にすぎません。でも、これが見間違いを生じさせるのです。

身近な例を挙げましょう。よくテレビではセブと金持ちが一緒にされていますよね、そうした混同です。ここでは、社会に名が知られていることを指す「セブ」が、「お金を持っている」という意味に置き換わっているのです。問題なのは、その見方が変だと思われていないことです。

## 問題となるお金

まあ、そんな世の中で、お金は信心の価値が喚起される要件になっていることは間違いありません。そして、お金は広前のあり方を安定的なものにし、布教堂為を確かなものとする手立てでもあります。しかしそれだけに、信心の価値は問題になってしまうのです。なぜでしょう？

繰り返しますが、その価値は、金銭通用の形式を借りて現れる「価値」に過ぎないからです。そして、その金銭通用上の価値=信用をもって、神との関わりの信用と見る間違いを起こしやすいからです。なんてたって「お金が物言う世」なのですから。

奉献金があり、それで支払われる事実自体、教祖さまは、そんな世の中に生きているのであり、この問題に向き合わざるを得ません。それが浅吉さんの博打や無心、宮建築であらわれたのでした。

## 広前での金銭融通

安政六年、神勤に専念されて以降、訪れた者に金銭を融通している姿があります。なかには、米と交換したり、行商人から物を買って援助したりしています。このように、神との関わりから発した信用は、金銭融通というかたちになってもあらわれています。

しかし訪れる者が金銭融通に見ている信用とは、どういうものだったのでしょうか？

## 金銭無心に訪れる山伏たち

資料は、巡礼、遊行する者たちが無心に来ていることを伝えています。はたして、ホントの山伏かどうか不明です。

たとえば、矢掛の「けん柳院」と称する者は、子ども連れでやって来て泊まっています。生活困窮者のようです。倉敷東町九松院と世話人沢屋奥蔵は、二度にわたってきますが、正体がばれるかと思ってか、二回目は名前を変えていました。教祖さまは、ウソを見抜きながらもお金を与えています。

このような事例を見ると、これまで布教合法化の路線で「布教が妨害された」と見てきたことも再考を余儀なくされます。彼らからすれば、教祖さまだって「二セ修験」でしょう。連中達は、「上京する」といって旅賃をせがみます。生活破綻が背景にあったのかもしれない。

近頃ニュースで、秋葉原や上野浅草寺界隈に「ニセ僧侶」が出没していると聞きましたが、そんなことを重ねて見ることになりました。彼らは中国からきて「ニセ坊主」を仲介され、それを仕事?に無心しています。彼らからすれば、何がホンモノで、何がニセモノか、そんなことはどうでもよい問題で、生きていくために利用できるものは何でも利用してやろうと考えているのではないのでしょうか。

中国からの「ニセ坊主」は、その日の稼ぎから何割かピンハネされながら暮らしていました。彼らにすれば、それが現実で、ホントとカウソとかの問題は二の次です。グローバル化した経済状況から生じた問題も、見ようによれば教祖さまの出合った問題といえなくもないでしょう。

### 浅吉さんの借財

神勤に専念してすぐの安政七年四月一日のこと、大きな問題が起きました。浅吉さんが博打をし、教祖さまのところに借金取り立てに人がやってきたのです。

たびたびの取り立てのようすからは、言葉は悪いですが、教祖さまが「金づる」と見られているのがわかります。神さまとの関わりに発した社会的信用が、金銭的価値にとっての信用に墮していることになります。

借金問題が落ち着いた、慶応四年三月一九日のこと、教祖さまは借金の検算をしています。そのときもたらされた感懐は、「金神様に御たすけ相成ありがたし」というものでした。

### 宮建築の頼み

浅吉さんの借金問題のさなか、神さまから宮の建築を頼まれました。資料には、「金乃神様御さしおけ 御宮社」とあるので、建築は神さまの意向によるものだということがわかります。けれど、「氏子たすけてやるための「まいりば所立」ともされています。なので、宮の建築は、人間の事情を汲んでのことだとわかります。

ここからわかるのは、「信心は宮(建物)が必要だ」とする社会通念です。信心に対する価値づけが、その通念から働いています。お金は、そうした価値づけの上に浮かびあがることになります。

お金には、人間と人間を結びつけるありかたが関わっています。つまり社会関係です。そして宮には、神と人を結びつけるあり方が関わっています。つまり信心のこと。そしてその両方に信用の問題が結びついていることになります。お金には社会が、宮には信心が、それぞれ対応して信用の問題を浮かばせています。

### 慶応四年四月三日、棟梁の解雇問題

慶応四年、棟梁のお金遣いが問題となって解雇されます。その際に、「今までの棒に振ってもかまわん」との神の言葉が発せられました。そこには、その言葉に対応する、教祖さまの偽らざる思いが伝わってきます。「今まで払ってきたのに」といった思いです。

その言葉を前にして、教祖さまは、いっそう神さまとの関わりの本質から問い返されるのではないのでしょうか。もし教祖さまが、このまま建築に動いていったならば、お金を生む場として広前を利用し、その信用を当てにする棟梁をはじめ、そのようにしかお金を見ない人や社会に対し、「信じること」の底からの変化を来さずに救いが可能だとしてしまうことになったでしょう。そしてその救いを生む場所として建てようとする宮を価値づけてしまうことになったでしょう。

## 見返される金銭

明治に入り、京役人への献金で使い込みが発覚しています。それを確かめながら、お金に対して「みな神様之銭」という意味づけがもたらされました。お金が問題となったことで、神との関わりの本質性から、世の中やご自身の動きが見極められることになったのです。そこでは、単にお金の扱いの不行状が問題にされているのではなく、そう扱われるお金に対する意味を大きく含んで見返され、「神様之銭」とされています。

お金が問題になるところで、問題全体を捉え返すというこの見返しは、神との関わりの本質的価値が、社会的、通念的、世俗的な価値にいったんゆだねられながら、転倒的、超越的に見出される問題だといえるでしょう。

お金は社会で通用しています。金銭通用の形式的価値にゆだねながら見出すことになったのが、お金に与えるべき意味としての「神様之銭」でした。これはお金に対する信用の在処が神との関わりで見出されたことを意味します。それは、世の中の形式的、あるいは通俗的、世俗的な価値で成り立っている「信用」を問い返し、そこに神との関わりを本質的なものとして見出す問題になっていると考えられるのです。

## III まとめ

このように見てくると、安政四年は、お金のさしむけが神との関わりを可能にさせる起点であるとともに、お金が関わる社会がつねに問題になることを承服させる起点だということがわかってきます。大事なものはそのように起点が見出されたという、そのことなのでしょう。そう見出されたことで、信心は、問題となる社会へ向けて自らの価値をあらわすように促されるのです。その促しは、社会通念に沿いつつも、そのように価値づけているあり方を転倒的なかたちで取り上げ、見極めさせるものとなっていると言えるでしょう。

考えてみれば、このような価値の反転した取り上げは、荒木美智雄先生が「価値の転倒による、力強い言葉とそのリズムで病める世界を周縁から癒し、新しい世界のリズムを創造する」と述べ、救済の本質と捉えておられた問題なのでした(荒木美智雄「宗教的自叙伝としての『金光大神御覚書』と『おかしな事覚帳』—その宗教学的意味について—『金光教学』23,1983,後『宗教の想像力』講談社学術文庫,2001)。

さて、最初に確認したように、現代の資本主義は危機的な状況にさしかかっているとの声が聞かれます。その資本主義は、すべてをお金の価値に還元してしまう強力な慣習、「金銭遣い」をもとにしています。ここまで見てきたのは、そのような貨幣経済への信心の関わりかた、見定めかたを考えさせるものとなっているでしょう。

高橋正雄は、「お金というものがなければならぬというものではない」とされました。ただし、「道がわかればねっ!」という前置きのもとです。ところで、この言葉は、どういう事実の上で発せられたのでしょうか。「世の中はお金というもので成り立っている」という厳然たる事実の上で発せられたのではないのでしょうか。わたしたちは、その事実と直面しながら生きているし、生きていかなければなりません。もっといえば、生き抜かなければなりません。

「お金がなければならぬということはない」。けれども現実には「お金がなければならぬ」。教祖さまを見てきて思うのは、この両方の間に橋を架け、道を立てられたということです。「道がわかればねっ!」と言われる前置きは、きっとこの問題の間に橋を架けるような「わかる」ってことでしょう。そのようにして神さまとの関わりを信じるという、その価値が捉えられる要があり、道の内実を理解することが求められていると言えます。これは大事な問題ではないでしょうか。

ありがとうございました。